

皆様、あけましておめでとうございます。「正信偈」を学ばせていただいております、だいぶ進んでまいりました。半分程進んできたわけでございます。初めに今日のところをご一緒に拝読させていただきますと思います。十三頁です。よろしいでしょうか。

釈迦如来楞伽山 為衆告命南天竺

釈迦如来が、楞伽山にましまして説法されたとき、  
聴衆に予告されました。

龍樹大士出於世 悉能摧破有無見

「南インドに龍樹という仏法に通達した偉大な人が現れ、  
有無に執らわれて真実を覆う見解を、  
ことごとく打ち砕くであろう。

宣説大乘無上法 證歡喜地生安樂

大きな乗り物のように、人みなを  
真の救いに至らせるこの上ない法を説き、  
身心に喜びの失せない生活を証して、  
いのちの安らぐさとの国に生まれしめるであろう」と。

顕示難行陸路苦 信樂易行水道樂

龍樹菩薩はさとりの道を明らかに示し、  
陸路をただ一人自力で歩く、  
苦しい難行よりも、みんなと共に船に乗り、  
仏力に任せて楽しく渡る念仏の易行道をすすめられました。

憶念弥陀仏本願 自然即時入必定

だから、阿弥陀仏の本願を忘れず心に憶（おも）い  
念じるならば、本願自然（じねん）のはたらきで、  
即座に、必ずさとりを開く身と約束され、  
迷いに退かない身になります。

唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩

ただよく、常に如来のみ名を称えて、  
大いなる悲願の恩恵に応えよ、と説いています。

先程もご住職様のご導師のもとに、「正信偈」のお勤めをさせていただきました。大変感銘の深いことでもあります。

十二頁の「印度西天之論家 中夏日域之高僧」から、「正信偈」は前半と後半に大きく二つに分かれております。前半は依経段とあって、『大無量寿経』に依って親鸞聖人が「正信念仏偈」として讃嘆されるということになります。

それから「印度西天之論家」から最後までが依釈段。七高僧ですね。印度・中国・日本を通して、七人の高僧の方々が、念仏の教えに生き、正しく信心に目覚めて生きるということを明らかにしておられる。そのことを親鸞聖人が讃えておるのであります。

いつものように初めにですね、感じたことを二つ程申し上げたいと思います。

一つはですね、これは真宗門徒の方々は、耳にたこが出来るほど聞いている言葉ではないかと思うのですが。八代目の蓮如上人の感銘の深い言葉を記された、『御一代記聞書』というのがあるのです。

### 『蓮如上人御一代記聞書』

1 一 勸修寺の道德、明応二年正月一日に御前へまいりたるに、蓮如上人、おおせられそうろう。「道德はいくつになるぞ。道德、念仏もうさるべし。自力の念仏というは、念仏おおくもうして仏にまいらせ、このもうしたる功德にて、仏のたすけたまわんずるようにおもうて、となうるなり。他力というは、弥陀をたのむ一念のおこるとき、やがて御たすけにあずかるなり。そののち念仏もうすは、御たすけありたるありがたさありがたさと、おもうところをよろこびて、南無阿弥陀仏に自力をくわえざるころなり。されば、他力とは、他の力というころなり。この一念、臨終までとおりて往生するなり」と、おおせそうろうなり。 (真宗聖典 八五四頁)

その最初の言葉なのですが、非常に感銘が深くてですね。道德という門弟が、蓮如上人にご挨拶に伺った。明応二年正月一日、蓮如上人が七十九歳の時ですね。若い時は七十九歳というと、相当お歳なのだと思っていたのですが、今は七十九歳というと、僕より若いのだなと。

正月一日に、挨拶に来られた道德に対して、蓮如上人が言われたのが、「道德はいくつになるぞ。道德、念仏もうさるべし」。こう言われたのです。年の初めに遭遇して最初にですね。いわゆる日常的な挨拶というものはなくして、「道德はいくつになるぞ。道德、念仏もうさるべし」と。余程響いたのでしょうね。『御一代記聞書』に記されておるわけですから。

今はですね、一月一日になって歳を取る人と、歳を取らない人がいます。戦前は日本の伝統として、新年を迎えるとみんな歳を取ったわけです。したがって新しい年を迎えて歳を取ることが、非常に厳粛な気持ちが強かったように感じます。ですから新しい年を迎えて、「道德はいくつになるぞ」。重たい言葉だと思うのです。

もし今、私自身が尊敬する先生から、「中津君、いくつになるぞ」と聞かれると、これは非常に響く言葉ですね。念仏もうしましようというふうに言われた。これは大変印象深くて、毎年、新年を迎えるところこの言葉を思い出すのであります。

私たち真宗の教えをいただくものは、元日が一年の始めでありますけれども、それは念仏もうさるべしと。念仏もうすということにおいて一年が始まると。一日が始まるという意味もあると思うのです。念仏に始まるということにはですね、自ずからなる道理を言っておられる。念仏ということは南無阿弥陀仏ということである。阿弥陀仏ということは無量寿。量り知れないいのち。量り知れない光。無限なる大いなる光といのち。それに帰依する。それをいただくところに、人間の生活があるということですから、念仏から始まるということは無限なる大いなるいのちに遇うところから、有限なる私たちのこの身が本当に照らされる。この身の重さ、尊さということが照らされる。

だから蓮如上人が年の初めに道德に対して、「道德はいくつになるぞ」と。あなたの人生はどうですかというね。そういう問いかけがあつて、念仏もうさるべし。念仏もうそうではありませんかということは、阿弥陀の大いなる光、大いなるいのちの中で生きてまいりましよう、という呼びかけでしょう。そこには世間的な挨拶を超えて、人間が生きるという根本の、それなくしては人

間が自分の人生を忘れ、いのちの尊さを忘れるようなそういう呼びかけを、念仏もうさるべしということにおいてしておられる。

具体的には道徳に向かって言われておるのですが、そういうことを聞きますと、私は私たちの出遇ったよき人から声をかけられていると。親鸞聖人からも、蓮如上人からも、声をかけられておる。そういうことを、聴聞ということが教えてくださっておるのだと感ずるのですね。

そこには喚起。呼びかけられておる。よき人から呼びかけられ、念仏そのものから呼びかけられておる。念仏はご承知のように、帰命という、南無ということは、阿弥陀の本願が衆生を呼び覚ます。そういう喚起する呼び声であるということを親鸞聖人は心を込めて註釈しておられます。人間が尊いいのちをいただいて、今年もまた生かさせていただくのであるということが年の初めに呼び起こされている。そういうことは、残りのいのちがあとわずかということのをですね、感じるようになってきますと、それはまことに意味が深いということのを思うのでございます。

もう一つは、鈴木大拙さん。鈴木大拙と言えば、世界的な仏教者ですが、敗戦からまもなく、天皇さんの前で仏法について御進講されたこともお有りです。仏教を世界に伝えたいと。英語が非常に堪能でありまして、親鸞聖人の根本のお聖教であります、『教行信証』をですね、英訳なさっているのです。それも九十歳の時に英訳しておられるのですよ。本当に驚くべき情熱と力。余程、大拙先生は仏法に生きるということが生活そのもの、身心そのものを養うようなそういう生き方をされたのだなと思うのです。

その鈴木大拙先生の秘書をしておられました岡村美穂子さんという方がいらっしゃって、英語の堪能な方で、アメリカで生まれた日系の方なのですが。その方に先生がどういうことを言われたかともうしますと、「九十にならないとわからないことがあるから、君も長生きしたまえ」と。岡村美穂子さんは、何十も歳が違う若い女性ですから、愛情を込めてですね、「九十にならないとわからないことがある」という言葉が私は特に惹かれます。

これはいつももうしあげていることではありますが、歳を重ねていくということは、ただいたずらに過ごすのではなくて、一年一年出遇っていくという、そういう大事な意味がある。常識的にいうと、定年退職して身体が動かなくなってくると、もう人生も終わりというか、もう用済みというような感覚に多くの場合なってくるでしょう。しかし仏法に遇ってですね、いのちをいただいていくと。

三帰依文は、「人身受け難し、いますでに受く」という言葉から始まります。人のいのちを、受け難い人身を、いのちを受けるということは、常に新しく出遇っていくという、そういう意味が込められていると思います。限りない出遇いということが教えられる、そういう人生をいただいておるのであるということのを思いますね。

それは「正信偈」の初めが、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」から始まっておる。量り知れないいのちの仏様に帰命し、量り知れない大いなる智慧の仏様に南無する。帰命する。「正信偈」は念仏から始まっておるわけですね。念仏から始まっておるということは、本当に感動の中の感動と。出遇いの感動から、そして讃嘆ですね。感動のこもった讃嘆。全身を揺るがすような讃嘆。そこから「正信偈」は歌われておる。私たちはそういう親鸞聖人が歌われた「正信偈」を今この時代でご一緒に聞くことができるということは、大変大きな恩恵であると思うのであります。

七高僧の龍樹菩薩は印度の方なのですが、仏教の伝統そのものの中で、大きなお仕事をされた方でありまして。龍樹菩薩はですね、西暦一五〇年から二五〇年くらいの間の人で、南印度のバラモンの家に生まれました。ご承知のように印度には階級制度（カースト）があって、大変厳しいわけです。

バラモンは司祭。クシャトリヤは王族。ヴァイシャは一般の庶民。シュードラとは奴隷というよ

うな、大変厳しい階級制度の中で、龍樹はバラモンの家に生まれたと。非常に小さい時から聡明で、色んなものを学び、ありとあらゆる地位を身に付けていかれて、突出しておられた。

これは青年時代でしょうか。いたずら心が起こって隠身術を身に付けたわけですね。身を隠す術。そこにおるのだけど見えないと。友だち三人と若き龍樹さんとね。隠身術を使って何をしたかという、王様の住まいの王宮に入って、王様に仕える美女たちと戯れる。快樂の限りを尽くすということをしておられた。

それがわかってしまってますね、これはなんとかしなきゃならんと、宮廷側は来るところに砂をまいておいた。砂をまいていくと足跡が残るものですから、それで見つかって、三人は殺された。龍樹さんは辛うじて生き残った。どういうふうにして生き残ったかという、頭が良いのですね。王様の後ろに隠れた。王様の近くへは人は寄れないと。それで生き残ったというふうに言われています。

そのことを通してね、愛欲に捉われてしまうということは、人間の苦悩のもとであると。快樂を求めてやまないけれども、これは苦のもとだということに気が付いた。ましてや友だちを失う程の苦のもとだということに気が付いて、非常に深く懺悔した。そして出家をして修行するという道に入った。ヒマラヤの山中で老修行僧がおられます。その修行僧に遇って、大乘の經典をいただいて修行する。非常に頭脳も優れた方ですから、そういうものが早く領けたようです。

論争すると、勝って得意になっているところに、大龍という菩薩がですね、龍樹のそういう姿を非常に悲しんだ。そして竜宮に行って、非常に奥深いところに蔵されている大乘の經典を龍樹菩薩に渡したと。それで龍樹はそれを一生懸命に学び、修行して、覚りを開いたと。そしてたくさんの著述を表した。

龍樹という名前は、大龍菩薩から龍という字を。樹というのは、アルジュナという木のもとで龍樹が生まれたと。それにちなんで龍樹というふうになづけられたと。伝説はそういうふう伝わっております。

龍樹の表わされました著作は沢山あるので、千部の論主と呼ばれておりますし、日本では八宗の祖師として崇められておりますね。中心になりますのは、『中論』、『十二門論』、『十住毘婆沙論』。色々あります。親鸞聖人はそういうお聖教を拝読されておることだと思います。

『十住毘婆沙論』。これは『教行信証』の行巻の中に出てくるのですが。菩薩の十地の歩みについて了解を述べる。そこに大事な易行道、難行道というような問題を明らかにして、念仏に帰すべきだということ述べている。やはりそういう大きなお仕事をされておると。

そして空の思想、中観の思想。まあ空（くう）というのは空（そら）ではなくしてですね、現実のいのちあるものの世界は空であると。実体がないと。今は人間の形をしているけど、縁があればいのち終わって現世に帰っていくというような。空ということが中々わからないわけです。後で出てきます、有無ということに捉われておるわけですが。

中観というのは、有でもない無でもない。有無の邪見を離れると。有というのは有ということに執着をする。無ということはないということに執着する。有というふうの実態があると執着する。無というのは無いという。ニヒリズムになるということがありますね。虚無主義。これは非常に深刻な問題です。

私が小学校四年生の時に、太平洋戦争敗戦になったわけですが、いわゆる戦前戦中の倫理が壊れていく。破壊されて。天皇中心だったものが民主主義の世の中になってきたということで、それまでに色々なことを生きがいとしていたものが、多くの場合壊れていくというようなことがあるわけです。ニヒリズムに走るという状況が非常に凄かったですね。エログロナンセンスというような言葉もありますけれども。そういう長い間禁じられていたものが出されたり、人間の生きる依り処が

失われて、やけのやんぱちというか、したい放題のことをして、楽しく快樂を中心に生きようという考えも根強かったですね。

まあそういう有無の見というのは単なる見解ではなくして、人間の生活を支配する。それが有無の見です。有るということは、例えば金なら金がなければならぬという。金はいつまでも有るものだというふうに執着して、更に人生を浪費するというふうな。だから有無の見ということは人間の生活の中に非常に深く根付いているわけですね。

だから邪見と言われる。邪（よこし）ま。人間の生活を失わしめる。これはですね、現代においても深刻な問題ですね。例えば学校において、先生は信頼できない。友だちは信頼できないということになりますと、多くの場合、生活が荒れてしまいます。生きるということの根本に関わるような問題ですね。また学力だけが、有名大学を出ることだけが幸せに生きる道だというような有の見のほうに縛られますと、人間性を養うということが忘れられて、人間が道具化していく。道具化していくと、悩むことができない。悩むことすらさせないようなね。そういうことが起こってくる。

私は幸いにも高校時代に先生に会うことができ、読書とか考えることとかそういうことを勧めてくださった。『歎異抄』も教えられたということがあって、悩むことができた。悩むことが出来たというのは悩んだと。親には心配かけたわけですよ。学校さぼって、草むらに行って本を読んでいたということがあるわけです。今私がこうしてあるのはやっぱりその時代に悩んで尋ねて出遇うべきものに出遇うことができたということによっていると思うのですね。

だから有無の邪見ということは人間を縛ってしまう。固定化してしまう。龍樹の時代の問題であると共に、釈尊の時代の問題であると共に、現代の私たちの問題である。そのことをはっきり受け止めていかないと、「正信偈」が遠いものになります。有無の邪見というのはどこにあるかと。私の中にある。私たちの中にあるというそういうことを、はっきり知らなければならぬと思います。

事実を事実のままに、ありのままに見るということを中観というのであります。まあこれは中観（ちゅうがん）というふうに読みますけれども。中観ということは何ですか、これは聞けば誰でもが納得するのであります。例えばですね、ちょっと言葉が難しくなるかも知れませんが、八不中道という。「不生、不滅」。生じないということであって滅せないという。こういういのちというのは、実体的に捉えると生ずるということに捉われてしまうわけです。なんでこんな農家みたいなところに生まれたのかということをおね。縁に依るのですけれども。それを運命的にして捉えてしまう。それを生ぜずと。滅ぜずと。

死ぬと言うことも、これもね、今で言えば交通事故で亡くなる時、こういうふうに亡くなるようになっておったのだと。運命なのだというふうに捉えてしまうと、本当にたまたまの縁で亡くなったということが縁として理解できない。縁というのは条件によって動くわけですね。だから生ずる滅する。「不常、不断」ということもですね。

それから一でない、異なる。「不一、不異」という言葉は何ですか、人間関係で言えば私と人とは一とは言えないと。しかし異なっているとも言えないと。これは人間の関係ですよ。どんなに仮に愛し合っていると言っても私と女房と一であるかという位置であるとは言えません。不一です。異なっているかという、そうは言えません。やっぱり女房が悩んでいるならば自分も悩むというような。そういう。一ではない、異なっていないという。

「不來、不滅」ということも、人間の生きておる事実というものは、有見、無見で量れるようなものではないと。気が付けば、事実それ自身が縁に随って発動し、動き、終わっていくような、そういうものである。この人生がそうですよね。誕生したということの誰かが生ましめようと思って生んだわけじゃない。縁があって生まれた。縁があって生活し、そして命終わるときも縁があって終わっていく。極めて自然の道理に従って生きておるわけでありましてけれども、そのことに目が眩

むと、運命的に、あるいは被害者的に捉えてしまう。逆の場合もあるわけですね、自分をえらいものだというふうに決めつける場合もある。

封建体制の中ではいわゆる階級があって、いい階級に生まれた者は、本人自身はそうでもないのに威張り散らすというようなこともありまして。この有無の見を離れるということが人として生きる上で大問題であると。

ちょっと前後する形になりますけれども、お釈迦様は楞伽山において、人々に説法なさった。そのお釈迦さんが説法された中に、龍樹大士が世に出られて、「南印度に龍樹という仏法に通達した偉大な人が現れ、有無に執られて真実を覆う見解を、ことごとく打ち砕くであろう。大きな乗り物のように、人みなを真の救いに至らせるこの上ない法を説き、身心に喜びの失せない生活を証して、いのち安らぐさとの国に生まれしめるであろう」ということを釈尊が説法なさった。

後にですね、何百年か経つわけですが、南インドで龍樹という仏法に通達する人が現れ、有無の見をことごとく破って、大きな乗り物に人々を導いて、大乘無上の法を説いた。大乘無上というのは大いなる乗り物ということです。大いなるもの。男であるとか女であるとか、歳がいつているとかいつていないとか。学問があるとかないとか、そういう人間の一切の区別。階級。そういったものを超えて、すべての人々が同じ仏法の乗り物に乗じて、この上ない大乘無上の法に乗ると。

この上ない法ということをする時、私は絶対に忘れてはならないと思うことは、無上というのはこの上もなく尊いのですが、尊いということはどこではっきり証明できるか。この私自身にまで響くと。無上というとおお尊いんだとこういうふうになってしまうかも知れませんが、大乘無上の法というのはこの私自身にまで響くという。これが大事なのですよね。

修行も出来ない、知識もそれ程もない、愚かな煩惱いっぱいこの身にまで響く。ともすれば大乘無上の法という、私と無関係に考えるならそれはとんでもない。間違いであって。すべての人々を目覚めさせるということはどうなるに愚かな煩惱衆生の身であってもそれを救い遂げるといふ。そこに大乘無上ということがあるわけですね。これは極めて大事なことです。

そして歓喜地を証して安楽に生ぜん、と。この歓喜地に証してということも、本当の喜びに満ちて、生活が再び地獄・餓鬼・畜生のような迷いの生活に退転することのない真に本当に安らぐ。いのちが育まれる、そういう浄土に生まれるということをするわけですね、仏陀釈尊が予告なさったわけですね。これを『楞伽経』という経に説かれておりまして、『楞伽懸記』というふうと呼んでおるのでありますけれども。

『楞伽経』というのは大乘の経でありますけれども、そういう予告をなさっておられた。これはなんというか、科学的とか常識的に考えるとそういうことがあるのかということになるかと思えますけれども、仏法をいただいていく上では、この釈尊の教え、明らかにされた真理、真実を継ぐ者が現れてくるということ、かねておおせになったと。そこに釈尊に次ぐ尊い仏者が誕生することにおいてはですね、科学的であるとかないとかというそういう話ではなくしてですね、そういう仏道の伝承、伝統というものを言われていると。受け取ることが出来ると思うのであります。

そういうところが、私は仏法ということを実際に、私たちがいただいていくという上に、真実としていただかれてくるという意味であると思えますね。真実には、事実の真実ということもありますけれども、物語とか伝説の中に真実が表現されておるといふようなことがあるわけですね。

親鸞聖人にも沢山の伝説がありますけれども、雪の中を行脚なさって、貧しい家に泊まられて、そこで親しい交わりを結ばれて、教えを伝えられたという。そういうことも、真実として私たちは受け取ることが出来るという。だから事実としての真実ということと、物語として語られる、あるいは伝説として語られる、そういう真実ということが、たしかにあるわけですね。

私は四国の生まれですが、小さい時から弘法大師の伝説がたくさんありまして、聞かされたのですね。それは事実としてはどうかわからんけれども、しかしそれを語って伝える人たちは、そこにまことというか、真実を感じて伝えるという。またそれによって育てられているということがあるわけです。そういうことを思いますと現代の時代はたしかに科学的な根拠、知識とか事実というものを尊重するということが大事なことでありますけれども、物語とか伝説ということにおいて、何を表現し、伝えようとしておるのかということが拒否されるならば、伝えられないならば、私は人間性が枯れていくと。痩せていくと。そういうことが言えるのではないかと思います。

親鸞聖人は釈尊が龍樹菩薩の誕生、そしてご出生されるということを予告された。その懸記をそのままいただかれておると。親鸞聖人ご自身が、そのままいただかれている。そして「正信偈」の中に歌われておるということは親鸞聖人ご自身が釈尊のおおせになったように、龍樹菩薩が釈尊の教えを本当に受け継ぎ伝えられて、明らかにしていかれた。そういう方としていただいております。ということがはっきりするのであります。

私はこういうことはですね、本当に大事なことでないかと思えますね。大乘無上の法ということにつきましては、大乘の本当に尊いすべての人々を救い遂げずにはいられない、この上ない尊い法であるということですが、そのことがこの身に響くと。その一点を離れますと、無上ということが自分を離れた無上になる。自分を離れて無上ということをいくら言われても、それは話にだけになってしまいます。だからそういうことが非常に大事なことであります。

そして有無の見。人間の中にある非常に深い、迷いの執着を破って、有無の見を摧破して、破って、砕き破ってですね、大乘無上の法を表わして、歡喜地を証して、安樂に生ぜん。歡喜地と言うことは、まことの喜びの生活なのです。「証歡喜地生安樂」ですね。歡喜地ということは、菩薩。菩薩というのは自分だけの救いを求めるのではなくして、自他。自らと他と共に目覚めていく救いの道を明らかにすると。

人間にはどうしてもエゴイズムという面が、自分だけ救いを求めるという面がありますけれども。本願の教えに遇うと、そういう人間存在の深みに法蔵菩薩の願いが宿されているという。そういう驚くべきことを、教えてくださるわけです。菩薩が道を求めていく。

歡喜地というのはもう再び迷いの生活に退転することのない、まことの喜びの生活を生きるという。菩薩の歩みから言えば、十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺ということで五十二。これが仏になっていくという歩みなのですけれども。

十地というのは、ふたたび迷いの生活に退転しない。これは人間として切実な願いなのです。迷いの生活に退転しないということは、はっきり申し上げますと、私たちが念仏をいただいて、まことの信心をいただくということは、再び迷いの生活に飲み込まれないという、そういう生活、そういう身が与えられる。もっと丁寧に言えば、迷ってもまた呼び覚まされる。徹底的に迷いの生活に飲み込まれない。埋没しないという、そういう生活が与えられるということを、苦勞して明らかにしてくださった。

だから歡喜地を証して。歡喜地と言うこともですね、十地の中の第一地が歡喜地。身を喜ばしめ、心に喜ばしめると。親鸞聖人は信心歡喜ということについて注釈しておられるわけですが、身心が本当に喜ぶと。喜ぶということは受け入れられると。いただくということですね。中々いただくということが大変なことなのですね。本願名号を信受して、この身にいただくと。この人生をただだけのかいただけないか。これは、私は決定的な問題だと思いますね。いただけたところには、悔いを残さなくていいと。この人生をどのような失敗があろうとも、辛いことがあろうとも、挫折があろうとも。それによって私の人生は開かれたと。かけがえのない人生になったと。そういう受け取りができると思えますね。

歡喜地を証して、安樂に生ぜん。安樂ということは安樂淨土。まことの、光明無量壽命無量の世界に生ずるといふ、そういう人間の根本的な課題に対して道が開かれるといふ、そういうことが歡喜地を証して、安樂に生ぜんといふことで言われております。これは釈尊が龍樹といふ方が出てくるという予告をされたわけですね。それを親鸞はそのまま「正信偈」に歌われた。まことに龍樹は釈尊の教え、生き様、それを継ぐ方に遇い、釈尊の予告の通り、龍樹は有無の邪見を破って、歡喜地を証して、安樂に生ずるといふことを表わしていかれた方であるといふことを、讃えられた。

次の段からは龍樹菩薩の教えといふところに入るわけですが、今日はそこまでいく余裕がありませんので、話の方はここで終わらせていただきまして、後は質問や座談でお願いいたします。どうも大変ありがとうございました。